

昭和三十二年を迎えた。この島に来て何年になるのか、くわしくいえば何十年になるのか、自分でもハッキリとは覚えていない。入園した当時は二年、三年、五年と何時でも覚えていたのだが、十年を過ぎる頃から次第にぼやけて、二十年、二十五年以後は、至極あいまいになって、人に聞かれても他人ごとのような返事しか出来なくなった。

診察のときなど、「入園して何年になりますか……」と、尋ねられても、咄嗟には答えられない。「では年令は？」と聞かれ、それも思い出せない。「この人、どうかしているのだからか？」と、若い看護婦さんにクスクス笑われることがある。別に年齢をいうことが恥ずかしいのでなく、また入園年数を隠そうとも思っていないのだが、「何年位になるでしょう」とはいえても、何才、何年間とハッキリは覚えていないのである。

入園して二三年の頃は、だいぶ先輩になったつもりで、自分から後に入園して来た人々をかぞえてみたりしていたが、何時のほどにか古参になって、十年頃には、何かの小さい集会のときなどで、思いがけず自分が一番の古株であったりする。そんなときは急に心の抛りどころを失ったようで、誰か古い人が来てくれないかなアと祈りたいような気持にもなる。――それが三十年にもなると、殆ど何時の場合でも一番古く、時偶にしか抛りどころを見出せなくて、そんな人がいて呉れる時はとてもうれしい。

入園名簿を繰ってみると、生存者で私より先に来ている人が、男八人、女九人で、私はその次の十八番目となっている。故郷の生活の二倍の年月の療養生活が続くなんて……クジをひいてもこんなクジは当たらないだろう。随分、長生きをしたものと思うこともあるがそれがまた勝手なもので自分のことになると、二昔も前のことが、昨日のことのように思い出されて、どうにも、こうにもならないほどの長いことのような気がしない。それどころか、一年々々、丹念に積み重ねて来て、三十年にもなったのだろうか、至極、当り前のことを不思議にさえ考えさられることがある。

慰問者に「こゝに来て何年になりますか」と度々尋ねられる。前記の診察の時と違って、外部からの人だけに、二年や三年なら気軽に答えられるのであるが、まさか、だしぬけに三十年ともいえぬ、「大分になります」と、曖昧な返答をして置いて向うの判断を待つ。「大分ってどの位です？」「エーほんとに大分なんですよ……」「……そんなら五、六年にもなるんですか」「エーまあ……」と先方の出してくれた数字に何時でも同調することになっている。五、六年でさえ大概の方が、可成りの歳月のように嘆息されるのであるから、実際の年数をいったらきつと、びっくりされることだろう。療養所での長い年月が、自慢になることでも、誇りになることでもないので、恥かしい気がするだけに私は年に関しての質問には何時も閉口する。

映画で一家中が揃って、にぎやかに誕生日を祝っている場面を、ときどき見受けるが、「今年は誕生日に何か、心ばかりでも……」と考えていても、肝心のその日には、とんと忘れていて、後になって気付くのが例年の常である。

以前は、正月に誰もが万遍に一つ宛、年を取ったから、何才になったと自分自身にも覚え易す

かったし、誰かとの開きで自分の歳もすぐ思い出せたが、戦後は三百六十五日まちまちになって、無精者の私には自分の年までが疎遠になり、一年に一つ加えることも忘れ勝ちである。若い人には考えられない甚だらしいことだが、実際だから仕方がない。これは年齢と共に加わる男の大まかな、ずるさであろうか。それとも良い意味での、変化の乏しい療養所ボケであろうか、壮健の人の心境を承りたいものである。

正月を迎えるたびに、今年こそはと、病者も病者なりに、元旦の計らしいものを立てて来たのだが、ふりかえってみると、これといったものは何一つしてない気がする。——しかし、これによいのである。

結構、私には、病者としての生活も楽しんで来れたし、これからもまた楽しめるであろうから……。

「子供らしい大人でありたい」これが私の理想で「二、三年治療したら帰れますよ」と大抵の新しい入園者という島のお世辞も、私の場合誰もがいつて呉れなかった。それは子供心に淋しいことであつたが、それほど、病気の進んでいた私が、兎にも角にも、こうして大した変りようもなく、三十年間を過して来れたと云うことは、何よりもうれしいことで、温い環境の中に春かすみのような精神で生活出来たことをひとえに感謝しなければならぬ。

こゝに新しい年を迎えたお慶びを申上げ、この一年が元旦のような、おおらかな「平和の年であつてくれるように」と祈つてやまない次第である。